博士論文要旨

一八〇〇年前後の宗教社会と民衆宗教の展開
―名古屋城下の如来教を中心に

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
イシハラ　ヤマト
石原　　和

本稿は、民衆宗教の歴史的位置づけの再検討を企図したものである。近代化論（講座派歴史学）を土台として、民衆宗教には、近代宗教の萌芽や国家に抵抗しうる可能性（＝民衆的近代）がみいだされてきた。そのため、他の宗教や社会を超えゆくものとしての側面ばかりが強調され、民衆宗教がおこった宗教社会の展開から分断され、まるで「孤高」の存在であるかのように位置づけられてきた。それゆえに、1990 年以降この土台が揺らいでくると、民衆宗教も基盤を失い、それ自体の歴史的位置づけも揺らいでいる。

民衆宗教研究の現状に対して、如来教を題材として、それが生まれ、展開した近世の宗教社会に位置づけることによって、新たな歴史的意義をみいだすこと、さらにこの研究分野自体をも相対化していくことを課題とした。具体的には、教祖と信者たちが生きた 1800 年前後の宗教社会の動向と関連づけながら、その開教と教義展開を明らかにしようとした。この時、当時を生きた人々のさまざまな信仰実践を明らかにすることで如来教の信者たち（ユーザー）が抱えた課題を探りつつ、そうした人々と教祖（メーカー）とがせめぎあう場として民衆宗教の救済（＝説教とその教義展開）を捉えていく方法をとった。

第一部では、近世宗教史上最大の動揺とも評される真宗の異安心騒動・三業惑乱に注目した。近年日本史の文脈で扱われるようになってきたこの一連の騒動と同時代的な宗教の動向として民衆宗教を検討することで、新たな近世宗教史への視角を得ようとした。

第一章では、真宗最大の異安心騒動である三業惑乱を、戦略的に近世後期の宗教の大きな動揺の始点に置き、ここに救済パラダイムの転換をみるという視点を提示した。具体的には、1750 年以降の異安心騒動の増加とその最中での門徒の反応から、つとめの方法への問いが時代的課題として登場したことをみた。本稿の中心課題である如来教もこの時代に開教し、展開した。この如来教の自力／他力論、願行論を分析すると、この救済もまた、つとめの方法への問いという時代的課題と共振するものであったことを明らかにした。

第二章では、近世名古屋における真宗の展開との関わりから如来教の教えの特徴を探り、歴史的に位置づけようとした。「新敷宗意」事件と尾州五人男事件の分析を通じて、名古屋の真宗異安心でも、つとめの方法への問いという課題が共有されたこと、その中で心の定置を強調する説教がなされたことを明らかにした。これらの動向から、如来教説教を考

察すると、如来教でも同様の論理を用いながら、心の定置に重きを置く救済が説かれていたことが確認できた。またこの五人男の説教が本山の教学的介入により排除されたのに対して、如来教の場合はこうした体制から自由であったため、救いを求める人々の願いに即した説教展開を持続できたのではないかとも指摘した。

第二部では、救済に関する課題を抱えた人々に対峙した如来教が、第一部で提示した 1800 年前後の救済パラダイムの中で、どのような役割を果たしたか、またそれを果たすにあたってどのような特徴を有していたかを明らかにしようとした。

第一章では、1800 年前後に生きる「渇仰の貴賤」の群像から、心の定置という方法の登場の背景を考察した。この頃、急増していた開帳と寺社の工事を事例として、結縁の場に積極的に赴き、金銭の提供や労働を厭わず仏神に「渇仰」する人々の姿を明らかにした。こうした実践の背景には、当時の人々が共有していた作善思想があった。善の実践を積むことによる救済が共有されていた社会にあって、如来教説教では、実践を否定し、その根本にある心のあり方を重視するものへと転化されていることがわかった。ここから、この心の定置という方法は、時に金銭の喜捨をともなう実践による救済から疎外された人を包み込む理論として機能したのではないかと指摘した。

第二章では、新興の宗教である如来教がいかにして社会的位置をみいだしたかを検討した。秋葉信仰は如来教と同時代に隆盛を迎えていた信仰で、同じく熱田を拠点とし、信者も重複していた。ゆえに如来教にとっては、対峙せざるを得ない存在であった。そのため、秋葉は度々説教で取りあげられた。この説教から、如来教が自らの世界を一旦解体し、秋葉信仰を組み込んだ新たな世界を構成していく過程を明らかにした。如来教は、こうした過程を通じて、秋葉の利益と信仰者を心の定置を説く救済の下に引き込んだ。この自己変容のあり方こそ、如来教が一大勢力を築くことができた重要な特徴であると指摘した。

第三章では、文政大地震後の如来教説教に注目して、如来教の現実への対応のあり方とその時の説教の展開に、いかなる特徴がみられるのかを検討した。そこでは世界観の次元で地震の原因を説明しつつ、現実を生きる人々の心の定置の問題もその中に組み込んでいく展開がみられた。如来教は目の前の事態への即時的・即興的な対応を通して、それまでに語ってきた救済の強化に成功した。また、ここにみられる説教の変容可能性は、地震という非日常の場面のみならず日常にも作用し、はやり神が隆盛を迎えていた時代の中で、信者を惹きつけ続ける魅力の維持・再生産に機能したと考えられると指摘した。

“1800 年前後宗教社会のつとめの方法の模索という課題（＝救済パラダイム）と、その中での心の定置という方法による救済の発見”という本稿の成果に対して、結章では、これを藩政改革がおこなわれた当時の名古屋の社会変動に関わらせながら、歴史的に位置づけようとした。その上で、つとめの模索の時代の中での能動的・実践的態度による救済と心の定置による救済のせめぎあいを明らかにしていくという視点は、名古屋城下の宗教社会と如来教の展開の分析する際のみに限られたものではなく、近世後期におこる諸宗教の動向を総体的に捉えていくこともできる視点ともなるのではないかと提起した。